

# 路地の子供

水谷年恵子

二人竝んで歩けないほぎ狭い路地が五六町續いてゐる。兩側は小家のお勝手口であつたり、板塀であつたりして、時折子供に逢ふ外は、殆ど人通のない小路である。

この路を朝通るミ、所々の家からラヂオ體操の號令が漏れて来る。又或家では數人の子供が狭苦しい一間で兩親ミ食卓を圍んで朝食をしてゐるらしい氣配が感じられ、或家では男の兒か女の兒か分らないが、お母さんに疳高い聲で叱られてゐる。「學校を休んではかりゐてだめ、だめつ」。

家ミ家ミの屋根に挟まれて、遠慮がちに枝葉をさしのべてゐる枇杷の一本が、それでも黄金色に匂ふ實を結んでゐる。塀の下に落ちた實がしなびて幾つかころがつてゐる。

日が暮れてから通るミ、何處かの家の窓から漏れるあかりが、路地の一部分にぼーつミ射してはゐるが、今日一日の疲勞ミ塵埃ミでよさんだ暗がり流れ込んで來て、此の

狭い路地を眞黒に塗りつぶさうミしてゐる。その鼻の先へ、突然「シヨ、シヨ、シヨ」寺の庭は、晴れやかな子供の歌がぶつかつた。思はずにこりこりするミ、「ボンボコボンノボン」ミお囃しが後へ流れた。

雨の日に、餡パンか何か買つて來た紙袋を大事さうにかかへて勢よく男の兒がやつて來た。雨に濡れるのが嬉しいやうな顔をしてゐる。少しおくれで蝙蝠傘が歩いてゐるやうな恰好で女の兒がやつて來た。「兄ちゃん」「兄ちゃん」「ミ傘の中から呼續けて行くのがあはれに聞えた。

初夏のすがすがしい午後、四つ位の男の兒が、さつぱりした單衣にへこ帯を締めてもらつて、小ぢやな下駄の音をカツコカツコいさせてやつて來た。私ミ向き合ひになつた時、兩手を膝に持つて來てベコリミ頭を下げた。「まあ可愛らしい」小腰をかどめてすれ違つて、「はて誰の子かしら」

と思つた途端に、後で、「アーン」ミ泣聲がした。ふりかへつて見るミ、今の兒が自分の脊位ある犬ミ出逢つて泣いてゐるのであつた。

この路地の入口の所ミ出口の所ミは路幅が三倍位に廣がつて、左側も右側も、家々の表口になつてゐる。中には門構の小家も交つてゐる。併し三倍位に廣がつた路地も、一方はものゝ半町ミ行かぬ中に電車通に出てしまひ、他方はすぐに自轉車なごのひつきりなしに通る表通りに突當つてしまふ。

午後のおやつから夕飯時までの間に、此處を通つて見ると、子供等は自らこの路地の入口や出口の稍々廣い路に集つて遊んでゐる。私は通りすがりに此處で子供等の色々な姿に接する。又子供等の色々な場面を観るのである。

雨上りの一掬ひの水たまりを、二三人の男の兒が取圍んで、割箸を持つて來て橋を懸けて楽しんでゐる。「鐵橋、鐵橋」ミ一人が叫んだ。その水は或家の入口の敷居際に出來てゐた小さな窪みに溜つた水である。

蒸暑い日もやうやう傾いて、そろ／＼家の前に打水がは

じまらうミいふのに、女の兒が數人まゝミこをしてゐる。その中の幼い二人は真塵の切端を路上に敷いて、ころりミ寝ころんでゐる。搗きたてのお餅のやうな、丸みのある白々ミした首や手や足が土の上にこぼれ出て、赤いちやん／＼を着た二人の童女はキャツキャツミ喜んでゐる。姉様ぶつた女の子等が玩具一つ持たないでその周圍にひしめいてゐた。寝ころんでゐた二人のおかつばがこちらに向けてゐた、あの真黒い足の裏が、その時私の臉に焼付けられたのだつた。その足の裏からいつも生々ミした土の香を放散してゐるやうに感じるはぎうしたこきであらう。

「あたいにも頂戴」一兩のお掌々を重ねて、小さな顎をぐつミつき上げて、小父さんにねだつてゐる女の兒がある。も一人の女の兒は無花果の葉つ葉を一枚貰つてにこ／＼ミもてあそんでゐる。小父さんはよその塀の外に立つて、「叱られるよ、そんなに葉つ葉を盗つたら。」ミ笑ひながら言つて、一枚もぎ取る所であつた。無花果の葉陰から、乳首のやうな青い實がちらつミ覗いて見えた。